

序文



関西では京都および滋賀地区を中心に「救急放射線画像研究会」が定期的に開催されており、症例検討を中心に毎回、活発な討論がされています(平成29年11月の段階で91回開催)。その世話人のお一人である早川克己先生(前 岩手県立釜石病院・京都市立病院)から、「東京でも若手のための救急放射線の勉強会を開催しては」というアドバイスをいただきました。そこで、藤田安彦先生(前 東京西徳洲会病院放射線科, 現 徳之島徳洲会病院院長), 高木 亮先生(日本医科大学付属病院放射線科, 現 日本大学)に賛同いただき、平成21年3月に第1回を開催する運びとなりました。先達による関西を中心とした「救急放射線画像研究会」に準えて、名称を「救急放射線画像研究会 in 東京」とし、症例持ち寄りの勉強会として始めました。平成30年1月現在で52回を重ねるに至っています。

平成24年に、本研究会の世話人3名(井田, 高木, 藤田)が編者を務め、研究会出席者を中心とする執筆による「画像診断別冊KEY BOOKシリーズ すぐ役立つ救急CT・MRI」の発刊に至りました。

改訂第2版では、章編者として「救急放射線画像研究会 in 東京」の世話人に新たに加わった服部貴行先生(大久保病院), 古川 顕先生(首都大学東京健康福祉学部), 田嶋 強先生(国立国際医療研究センター病院), 森田 賢先生(東京女子医科大学)にも担当していただきました。さらに、「呼吸器」の章に芦澤和人先生(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科)にも加わっていただきました。

また初版に引き続き、早川克己先生に救急画像診断時の造影剤の適正な使用方法や注視点について、最新情報を含めてご執筆いただきました。

放射線科医は読影室にこもってばかりいるのではなく、CTやMRI, IVRの現場で撮像プロトコルの指示を出し、緊急読影を行い迅速に診断を提供することで、救急スタッフの一員として責務を果たすことが可能となります。救急現場で積極的に検査法を提案し画像診断管理を行うことで、時期を逸さない、より効率的かつ非侵襲的な診断法を組み立てることができるようになります。初療段階で放射線科医が病態診断に関与することで、主治医単独の自己完結型医療を防ぎ、よりの確な診断と治療方針の選択につながります。予約外の緊急検査依頼を断ることに心血を注ぐより、救急主治医と一緒に診断のためにどのような撮像法が適しているかを考える方が、患者にとっても有益です。

本書が放射線科のみならず救急を志す若手医師の一助となることを願い、そして多くの放射線科医が救急に興味をもってくれることを望みます。

井田正博



「画像診断別冊KEY BOOKシリーズ すぐ役立つ救急のCT・MRI」は救急疾患の画像診断を勉強する初学者ために企画された本で、初版の発行から約6年が経過しました。この本を企画した当時は、救急診療で比較的多く遭遇する疾患を中心に症例を選び、放射線科医や放射線技師はもとより、当直業務を行う救急医、外科医、内科医にも気軽に手に取ってもらえるような本を目指しました。第2版に向けて、実際の救急診療を考えて外傷と非外傷性を分けて疾患を整理しました。また、初版では少し物足りなかった胸部、腹部の非外傷性救急疾患について、この分野の専門の先生に新たに章編者に加わっていただき、より充実した内容になるように心がけました。さらに、症例が多くなりすぎて本が重くならないことにも留意しました。救急診療では、本を読みながら診察をするような余裕はありません。ちょっと気になった症例を、気軽にパッと手に取って勉強できることも大切な要素と考えました。第2版を救急診療の画像診断に少しでも役に立てていただければ幸いに思います。

最後に、新たに章編者に加わっていただいた先生方に深く御礼を申し上げます。

高木 亮



平成21年3月に井田先生のお誘いで「救急放射線画像研究会 in 東京」に参加することになった次第ですが、本研究会は井田正博先生と高木 亮先生が中心になり、症例持ち寄りの勉強会として始まりました。そして現在も症例検討を中心に毎回、活発な討論がされています。

平成24年には研究会出席者を中心に各項の執筆を担当して、「画像診断別冊KEY BOOKシリーズ すぐ役立つ救急CT・MRI」を発刊することができました。これもひとえに執筆者と学研メディカル秀潤社の担当者が尽力されたおかげだと感謝しております。

今回は、井田正博先生、高木 亮先生をはじめ、古川 顕先生、服部貴行先生、森田 顕先生など素晴らしい放射線診断専門医が参加されることになり、この出版に参加できることは大変光栄に思っています。現在は、内科の仕事に従事しながら管理職・臨床などに携わっていますので、現役の放射線診断専門医ではありませんが、このような救急画像診断の大切さを知る機会を与えていただき、ありがとうございます。

救急の現場で、本書が多くの研修医や救急現場の多職種に利用され、患者様の治療に貢献できることを願っています。

藤田安彦

2018年1月

初版の序

CT, MR の高速化により救急疾患にも広く画像診断が適応されるようになった一方で、通常の診療における対応で手いっぱいなことから、救急疾患の画像診断管理、読影を行っていない施設もある。しかし救急は疾患急性期のゲートキーパーであり、その時点で放射線科診断専門医が深く関与することで、主治医単独の自己管轄型医療を防止し、より正しい診断そして治療方針の選択につながる。

放射線科医は読影室にこもっているばかりではなく、CT, MR の撮影現場で指示を出し、至急の読影をこなすことで、病院の救急スタッフの一員として責務を果たすことができる。初回CTの読影からその後の検査法を提案することで、時期を逸しない、無駄のない、より非侵襲的な診断法が組み立てることができる。予約外の救急依頼を断ることに心血を注ぐよりは、救急主治医と一緒に、診断のためにどのような撮像プロトコールが適しているかを考える方が患者にとっても有益である。

あらゆる疾患、病態が救急受診の対象となるが、3次救急のみならず1次もしくは2次救急の施設でも比較的良好に遭遇する急性疾患について、中枢神経から骨盤領域のCT, MR 診断を網羅した1冊として本書を企画した。「CTは16列以上のマルチスライスCTが使用でき、MRも1.5T装置で救急対応ができること」を念頭に置いている。すでにCT, MRの画像診断に関する成書は数多く出版されており、本書に掲載されている疾患名に真新しいものはないが、救急疾患をまとめたことで横断的な内容となっている。原稿は編者たちよりも1～2世代下の若手放射線科医に多くを託した。また救急画像診断時の造影剤の適正な使用方法や注意について京都市立病院の早川克己先生にお願いした。

初版ではあらゆる疾患を網羅しているわけではなく、記述に精彩さを欠くところもあるかもしれないが、本書が放射線科のみならず救急を志す若手医師の一助となること願い、そして多くの放射線科医が救急に興味をもってくれることを望む。

井田正博

『画像診断別冊 KEY BOOK シリーズ』は画像診断を勉強する医師にとって非常に使いやすい教科書として定評があり、今回、救急のシリーズの編者をさせていただいたことを大変光栄に思っています。企画の段階で話し合われたことは、稀な疾患や難しい症例ではなく、日常の救急診療でよく経験するものを中心に解説しようということでした。救急は対象となる臓器が全身に及ぶため一冊の教科書ですべてカバーすることは容易ではありません。しかし、緊急で施行されるCTやMRにはある種の傾向があり、頻度の高い疾患とその特徴的な画像所見をつかんでおくことが大切だと思います。救急の画像診断で重要なことは、鑑別疾患を多く挙げることや非常に稀な疾患をピタッと的中させるのではなく、緊急性を吟味した上でできる限り迅速に適切な検査を行うこと、臨床像に合致する所見の有無をすぐに評価すること、次の治療に結びつための情報を一つでも多く拾い上げていくことにあります。この教科書は本棚ではなく夜間緊急検査を行うCT室の机に置いて、放射線科医だけでなく、放射線技師や研修医、若手の救急医に気軽に手にとってもらえるようになることを願っています。

高木 亮

救急疾患における画像診断の役割は非常に大きく、診断の遅れが救命率を左右する。救急対応で慌てないためにも、準備すべき知識・病態を知ることが救急にとって大切なものとする。急性腹症、頭部外傷、胸部救急疾患などでは画像で知りえる情報がきわめて多し、見逃してはいけないポイントが多岐に渡っている。外来や病棟などでみる機会の多い疾患について、各分野におけるベテラン医師が実際の症例を提示し、一般的な知識、診断ポイント、画像所見などについてわかりやすく解説している。

井田正博先生に誘われて今回の企画を計画した次第であるが、井田・高木両先生の尽力によってこの書が完成するに至った経緯がある。救急の現場に立つ一人として、日常診療に非常に役立つ書を作成する機会をいただいて関係各位に対し感謝している。この書が、臨床現場で働く若い医師にとってお役に立てれば幸いである。

藤田安彦